

ジーシー創業90周年・GC友の会55周年

第3回 国際歯科シンポジウム

—これからの歯科医療の姿を考える—

秋の深まりが感じられる10月22日(土)と23日(日)の2日間にわたり、東京国際フォーラムでジーシー創業90周年・GC友の会55周年を記念して「第3回 国際歯科シンポジウム」を開催いたしました。会期中はあいにくの天候にもかかわらず、歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士、スタッフの方々4,975名にご参加いただきました。心より感謝申し上げます。参加登録費は被災地の復興支援のために全額寄付させていただきました。本シンポジウムは、国内外70名の著名な研究者・臨床家を講師陣に迎えた29のセッション・デモンストレーション、注目の新製品や話題の製品を展示したデンタルショー、市民向けフォーラムの3部構成で開催。22日に執り行われた開会式では、(社)日本歯科医師会 大久保満男会長をはじめ、ご来賓の方々からご挨拶をいただきました。

株式会社ジーシー 代表取締役社長 中尾 眞

皆様のおかげで創業90周年・GC友の会55周年を迎えることができました。本シンポジウムでは29のセッション・デモンストレーションのほかに、地下のホールではデンタルショーと歯科医師会主催の市民フォーラムを開催いたします。この機会に新しい歯科情報に接していただくとともに、新しいエネルギーを創出していただき、東北地方に元気を、日本に元気を与える会となることを期待しています。



社団法人日本歯科医師会 会長 大久保満男 先生

東日本大震災においては、歯科医師が外見での身元確認が困難なご遺体の確認作業を行いました。また、20万人を越す被災者の健康支援を続けております。これらの活動を通じて、私はこんな言葉を思い出しました。日本には3つのふるさとのある。それは、生まれた場所、育った場所、そして社会の中で同じ志を持つ仲間が集まるところであるというものです。本シンポジウムが、同じ志を持つ者たちの絆を深めるシンポジウムとなることを期待しています。



日本歯科医学会 会長 江藤一洋 先生

GC友の会は、中尾清会長とともに歯科材料研究所を作られた東京医科歯科大学の長尾優先生が、「材料は臨床とともに歩む」とおっしゃったことを機に組織されたと伺っています。また、友の会を通じて啓発された先生方が勉強され、そこで得た気づきを材料の開発に生かすシステムがあったからこそ、ジーシー90年の歴史があるとも伺っております。本シンポジウムは、日本の歯科の実力を世界に発信する場です。ご参加の先生方には、力強く活発なご議論をお願いいたします。

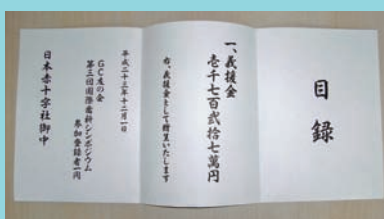


大韓歯科医師会 会長 Se-Young, Kim 先生

世界は今、デジタル革命やバイオテクノロジー革命によって、大きな変化を迎えています。我々に求められるのは、歯科医学及び歯科材料事業の競争力の向上です。最先端の歯科材料開発によって、歯科材料産業が確かなものになった時、歯科界全体の発展も遂げられると考えます。GCグループやGC Koreaが今後も発展し続けることを願いつつ、また、韓国歯科材料事業に健全な刺激と挑戦を与えられるような、兄弟のような協力関係を築くことができたらと思っております。



参加登録費は被災地の復興支援のため、 全額寄付させていただきました。



日本赤十字社 副社長 大塚義治 様に弊社代表取締役社長の中尾 眞より目録を贈呈



Anniversary Symposium



新しい病態の予測と対応

新しい病態の予測と対応

田上順次 先生



高齢化が急速に進み、65歳以上の受診者数が増えています。これは疾患を抱えた高齢者の増加を意味します。口腔における変化としては、8020運動により高齢者の

残存歯数が増えています。高齢で天然歯が残っている場合、歯周病が懸念され、実際、歯周ポケットが4mm以上の人が増えています。こうした状況を踏まえると、高齢者のケアは複雑で難しくなると言え、必然的にMI治療と予防歯科の取り組み

が必要になると考えられます。

コンポジットレジンが性能が高まる中、米国のオピニオンリーダーたちにおいても、多数歯の修復を直接法で行うケースが増えています。これならば、ほとんど歯を削らずに修復が可能です。これからMI治療を希望する患者は増えるでしょう。

う窩がなければ再石灰化が可能というエビデンスが揃ってまいりました。内科的う蝕治療には、生活習慣指導、抗菌剤の使用、プラークコントロール、フッ化物の使用、リン酸カルシウムの使用、唾液の分泌促進があります。MIペーストは、フッ素塗布に比べ効果の現れはゆるやかですが、自宅のできる有効な手段です。

歯の硬組織疾患治療の現在と未来

Reinhard Hickel 先生



世界的に充填材が変化しています。国の保険制度により違いがあり、アメリカ、ドイツではアマルガムの使用が減り、スウェーデン、ノルウェーにおいては使用を停止して

います。2010年に各国で行われた計160万例の充填処置のうち、100万例がコンポジットレジン充填でした。

また、MI治療が重要なトピックとなっています。MI治療は、

う蝕検出、予防、修復、リコールからなっています。まず、早期う蝕検出とリスク評価が重要です。推奨できる診断は、ルーペによる目視、ダイアグノセント、バイトウイングレントゲンの3つです。理由は臨床データが豊富にあるからです。今後はう蝕の診断をより確実に行える装置の開発が必要でしょう。次に、リスク評価です。必要な指標はカリエス経験、フッ素摂取量、口腔衛生、栄養、社会的パラメーター、細菌学的要素などで、これらによりリスクを判断し、対策を講じます。最後に修復です。将来はより多くの歯質を温存するダイレクトな修復が増えるでしょう。

中国における、保存修復学の現況と発展の傾向

Hou Ben-xiang 先生



中国の歯科レベルは、国土の広さが影響して地域ごとにバラツキがあります。学生制度も5年、7年、8年とあり、統一されていません。2000年からは歯科医師の生涯教育をはじめ、2010年からは25クレジットを2回獲得しなければ歯科医師免許が取り消されます。

2005年のう蝕調査の状況を見ると、カリエスは若者と老年に

多くなっています。中国では口腔衛生に関する意識が薄く、予防歯科が普及していないのです。加えて、若者の間では炭酸飲料が流行っています。

政府は北京を中心に歯科医療ネットワークを設立し、子どもへの呼びかけを実施しているほか、歯科車両が大学や工場をまわり、診察にあたっています。このほか、歯科医師の教育に注力しています。

中国における歯科の課題として、患者と歯科医師間での信頼関係の構築、そして患者の満足度を高めていくことが重要となるでしょう。

Symposium

Dr.

MIを視点においた歯科臨床を探る ～歯の保存から再生・メンテナンス～

宮本泰和 先生 (コーディネーター) 水上哲也 先生 和泉雄一 先生 村上伸也 先生



本セッションでは宮本先生を座長に、水上先生の「積極的治療 MI治療の選択と適応を探る」、和泉先生の「歯周組織安定のための大学病院の取り組み」、村上先生の「歯周組織再生療法の未来像」の講演が行われた。はじめにMIは、介入の少ない治療、できるだけ侵襲の少ない治療と定義されているが、インプラント治療を含め、外科的処置が行われても長期的に歯を救えれば、MIと言えるのでは?という問題提起が座長からなされた。水上先生は、コーンビーム断層撮影法を用

いた臨床例を示して、正確な診査・診断の重要性を説き、正しい診査診断に基づく治療計画が大切で、それがMIに繋がると述べた。和泉先生は、歯周治療では化学療法を部分的に併用した機械化学療法に移行しつつあり、さらにレーザーを中心とする光療法が用いられている現状を紹介した。また、村上先生のサイトカインを用いた歯周組織再生誘導の取り組みからは、歯周組織再生療法の新たな方向性が示された。

失われた欠損機能の回復のための歯科臨床技術の進化

Dr.

前田芳信 先生 (コーディネーター) Ignace Naert 先生
土屋賢司 先生 (コーディネーター) 南昌宏 先生 林美穂 先生 Pascal Magne 先生 Jean-Pierre Brun 先生



1つめのテーマは「インプラントオーバーデンチャー (IOD) の適用を再考する」。まず、前田先生がIODの適用条件等に関する問題提起を行った。その後、Naert先生が25年の臨床経験から、上下顎における可撤性・固定性ハイブリッド補綴という新たな概念に基づいたIODの適用とその考え方を示した。続いて「患者満足度の高い審美補綴・欠損補綴とは」をテーマに、まず、土屋先生がMI臨床に欠かせない最新の手技や治療上考慮すべきことを解説。続いて、南先生が「審美補綴治療

のゴールと成功の要件」と題し、最新の歯周マネジメントの考え方を、林先生が「生体主導で考える審美欠損補綴のあり方」と題し、生体との調和を考慮した審美欠損補綴の考え方を示した。さらに、Magne先生が「Bio-emulation in Posterior Bonded Restorations」と題し、CRIによる臼歯部の接着修復の可能性を、Brun先生が「審美性と機能の回復における臨床技術の進歩」と題し、審美補綴を先進のCAD/CAMでサポートするAadvaシステムの概要を解説した。

患者さんとの関わりを大切にする歯科衛生士の役割

Part 1 歯科衛生士に必要な基本スキルとコミュニケーションを見なおす

村上恵子 先生・大住祐子 先生（コーディネーター） 東方法子 先生 上村佳子 先生 川崎律子 先生 品田和美 先生



Part1では、歯科衛生士の基本スキルやコミュニケーションについてを各年代の講師から症例をまじえてご講演いただいた。東方法先生は「病態をわかってもらう為のコミュニケーション」と題し、患者さんに自身の病態をよく理解してもらうことによって信頼関係が構築できた症例を示し、歯科衛生士が患者さんと歯科医師の間に入ってコミュニケーションをとることの大切さについて語った。上村先生は16年間の臨床経験を振り返り、様々な人

との出会いについてや、情報をキャッチするアンテナを多くもち、自分の引き出しを多くすることが臨床に役立つと話した。川崎先生は「コミュニケーションスキルと人間関係」をテーマに、円滑な人間関係構築の「コツ」として、「かきくけこの法則」を紹介し、活用する方法を解説した。品田先生はそれぞれ症状の違う患者にどのようにかかわっていくか、患者さんの口腔内と全身の変化を察知できる観察力を身につけることが大切であると語った。

患者さんとの関わりを大切にする歯科衛生士の役割

Part 2 日常の疑問を解決し、もっと視野を広げるために

村上恵子 先生・大住祐子 先生（コーディネーター） 新田 浩 先生 橋本貞充 先生 日山邦枝 先生



Part2では、歯科衛生士としての知識や視野をより広げることがを目的に、新田 浩先生や橋本貞充先生ら研究者と、歯科衛生士で在宅診療や高齢者歯科に精通する日山邦枝先生が登場した。

新田先生は「歯周病の最新情報 今わかっていること・わかっていないこと」と題し、プラークコントロールからインフュージョンコントロールへと歯周治療の概念が変わり、それに伴って歯周治療の中身が新しく分類されたことや、抗菌療法

が最新の研究成果からどの程度効果があるのか、また、全身疾患と歯周病の関係について最新の知見を解説した。橋本先生は歯肉や口腔粘膜に見える変化や炎症を具体的に写真で示し、わずかな違いを見逃さない目を養うことの重要性を解説した。日山先生は、在宅診療に携わる歯科衛生士は、患者の全身疾患や環境及び心身状態を考慮するとともに、患者の家族にも向き合う必要があると語り、特に患者の機能訓練は危険が伴うことを頭に入れて行う必要があると解説した。

Symposium

Dr.
DT

歯科医師と歯科技工士の連携・知識の共有

日高豊彦 先生 (コーディネーター) 税所秀揮 先生 高橋 健 先生 奥森健史 先生



まずはじめに、コーディネーターの日高先生が、診断用ワックスアップとプロビジョナルレストレーションにおける歯科医師と歯科技工士の情報共有の重要性について述べた。1人目のパネリストとして登壇した税所先生は「The information from diagnosis～ラボサイドにおける情報マネジメントの提案～」と題し、プレゼンテーションソフトにより技工指示書や写真データを管理する方法を提案した。次に、奥森先生が「パーシャルデンチャーデザイン～欠損歯列において、補綴設

計を立体化するキーワード～」と題し、パーシャルデンチャーを劇的に機能させるための方策について解説した。最後に、高橋先生が「Esthetic Approach in Clinical Dentistry～Digital Communication and the Future～」と題し、近年長足の進歩を遂げているCAD/CAMによる設計・製作の実際を示し、そのさまざまなメリットを紹介した。

補綴物設計・製作の現状と展望、そのために必要な技術研鑽とスキルは

DT

行田克則 先生 (コーディネーター) 小田中康裕 先生 山本尚吾 先生



歯科技工士を対象として、行田先生をコーディネーターに、小田中先生「私の考えるメタルセラミックス」と山本先生「審美修復におけるプロセスとデザイン」—Bianco e Rosso—の2題の講演が行われた。小田中先生は、オールセラミックスが審美の代名詞となっている現在、メタルセラミックスのほうが臨床においては優れている面が多いことを指摘し、オールセラミックスと遜色のない補綴物を製作するために重要な要素である色調について解説した。山本先生は、補綴物を製作

するときにはある程度ルールを決めておくことが大切として、重要視している連続するパラレルコンセプトにもとづいた症例を提示した。審美的で強度もある補綴物を製作するためには、歯科医師側も軟組織のコントロールをしっかりと行わなければならないと行田先生がまとめた。

これからの歯科臨床に必要なスキルと考える臨床とは

鈴木 尚 先生 (コーディネーター) 熊谷真一 先生 若林健史 先生 渡辺隆史 先生 藤関雅嗣 先生



歯科臨床において「考えるスキル、手技のスキル」を磨くことが重要とのコンセプトで、4人の演者が症例等を通して必要なスキルを述べた。熊谷先生は、診療は3つの視点—マイクロへの視点、マクロへの視点、人間への視点のバランスが大切と述べた後、CR修復の経過観察から見えること、トゥースウェア、歯髄保存について語った。若林先生は、歯周病患者の長期経過観察から良好に推移した理由を考察し、歯周治療で必要なものを示した。また、小外科手術では有病者の治療

トラブル回避や痛くない麻酔法を解説した。渡辺先生は、臨床に必要なスキルとして補綴的な介入範囲の少ない低侵襲治療をあげ、咬合治療とMTMを融合させることはそれを実現させる可能性があるとして述べた。藤関先生は、補綴分野におけるCr-Br、PDの症例を示し、欠損歯列の診査・診断の重要性やCr-Brの形成(術者のポジショニング、印象採得、咬合採得など)における手技スキルを動画で紹介した。

長期臨床観察から見えること ~考える歯科臨床・必要な技術~

菅野博康 先生 (コーディネーター) 千葉英史 先生 須貝昭弘 先生 永田省藏 先生 大村祐進 先生



長期臨床観察している4人の演者の視点を通して、臨床では何が重要かが語られた。須貝先生は、8020を達成している人の咬合、歯列を示した後で、正常咬合になるには正しい成長過程があるとして、成長ステージに合わせた咬合育成が必要であると述べた。そして正常咬合を妨げる要因—萌出異常、スペース不足、悪習癖の症例を紹介した。千葉先生は、経過から考える歯周病治療の要点として、患者のセルフコントロール、患者と歯科医院を長期につなぐメンテナンスの在り方、

患者の歯周病の流れを読む、歯の動揺をみる、などをあげた。大村先生は、歯肉と補綴物の調和を求めて、との観点から、ティッシュサポートの考え方に基づいて行った臨床と経過を示し、今後の課題についても触れた。永田先生は、欠損補綴における咬合の観点から、ゴシックアーチの問題提起を行い、ゴシックアーチの読み方やその有用性を語った。

Symposium

Dr.

アジアの歯科事情 ～アジアにおける審美歯科治療の現況～

植松厚夫 先生 (コーディネーター) 北原信也 先生 Woo Yi-hyung 先生 Feng-ping Liao 先生



北原先生、Woo先生、Liao先生が、日本、韓国、台湾におけるそれぞれの審美歯科治療について、独自の症例とともに紹介した。

北原先生はボンデッドレストレーションにおける接着のアップデートについて解説した。審美修復治療を行う際には、口腔の健康を将来にわたって保つためにMI (Minimal Intervention: 最小限の治療介入) ではなく、OI (Optimal Intervention: 最適な治療介入) を心がけることで、口腔の健康を将来にわ

たって保つことができると強調した。

Woo先生は韓国における審美歯科の状況を紹介し、材料科学の進展とともにセラミック修復が注目を集め、インプラントによる幅広い治療が提供されていると述べた。また、Liao先生は審美性に配慮してコンポジットレジン充填を行う際には、歯の形状、歯肉、顔貌などの関係に注意して、周囲の色調を活かす必要があると解説した。

アジアの歯科事情 ～高齢者社会における歯科の関わり 欠損補綴の臨床～

Dr.

寺西邦彦 先生 (コーディネーター) Che-Tong Lin 先生 Jeong Chang-mo 先生



寺西先生、Lin先生、Jeong先生が、日本、台湾、韓国におけるそれぞれの高齢者歯科治療について、独自の知見とともに紹介した。

寺西先生は総義歯補綴学に基づくインプラント治療について、総義歯補綴の難症例を交えて意見を述べた。器質的難症例と心理的難症例という分類を紹介したうえで、総義歯補綴学における研究成果を活かす必要性を強調した。さらに、可撤性のインプラント・オーバー・デンチャーの有効性につい

ても評価した。

Lin先生は台湾における高齢化現象と歯科保険制度について解説するなかで、特に補綴治療への保険適用が日本における適用範囲とは異なることに言及した。また、Jeong先生は治療を長期的に成功させるためには、患者の状態を詳細に把握し、骨の支持能力の範囲内で咬合力を付与できる適切なアンカレッジシステムを選択する必要があると述べた。

Dr.

矯正治療のグローバルスタンダードを考える

森山啓司 先生 (コーディネーター) Young-Chel Park 先生 竹元京人 先生



森山先生が、歯科矯正が顎口腔系の機能の中で担う意義、特にQOLの向上に寄与する点を示し、不正咬合の病態、診査・診断の重要性、2次元診断から3次元診断への技術の進歩について述べるとともに、3Dシミュレーションの可能性について解説した。Park先生は、歯科用ミニスクリューインプラントを用いた歯科矯正治療の実際を豊富な症例を基に紹介。バイオリジカルとバイオメカニクスのバックグラウンドを理解し、適材適所の応用を考慮すれば効率的な治療を遂行で

きることを示した。竹元先生は、自身がこれまで取り組んできた舌側矯正のシステムについて、開発と改良を重ね、現在、ほとんどの症例に使用しているリングルストレートワイヤー法に行き着いた経緯とその有用性を、症例を示しながら報告。間接ボンディング法を用いたブラケットの正確な位置付けが重要である点やブラケット自体の改良にも触れ、良好な臨床結果を示した。

患者さんにやさしい矯正治療の未来像

後藤滋巳 先生 (コーディネーター) 榎 宏太郎 先生 筒井照子 先生



本セッションでは、矯正治療が患者にとってやさしいものであるためにはどうあるべきかを再考することを目的とし、3名のシンポジストによって進歩的かつ効率的な治療方法が提案された。

後藤先生は、マルチブラケットシステムを用いた矯正治療中に発生するう蝕に対し、ブラケット装着箇所にラミネートベニアで被覆することでエナメル質を保護する臨床応用を示した。

榎先生は、咬合や咀嚼の生物学的な意義に立ち返ったうえで

矯正治療の必要性を解説するとともに、微弱な力でありながらも早い移動を実現させたブラケットを用いた新しい矯正治療を紹介した。

筒井先生は、軟食・日常生活での姿勢の癖(態癖)などの生活習慣がもたらす不正咬合や機能障害、全身的な不定愁訴の改善に対し、矯正医がいかにアプローチできるかを語った。

Dr.

GC Seminar Special Program

みんなで注目！ ライブ・ブラッシング指導



■ 今村智之 先生 今村幸恵 先生 平井由紀子 先生

患者のモチベーションを上げるためのブラッシング指導法についての講演後、聴講者の体験ブラッシングが行われた。また、DHによる1回目のTBIを既に診療室で終えた患者さんを会場内に招き、2回目のTBIをライブで行う、初の試みとなった。その際の注目点として、①一部位ずつの狙い指導、②患者自身に気づかせる指導、③「磨けていない」など否定しない指導が示され、指導の最後には、患者の達成感を知ることも重要と語った。

DH

そこが知りたい！ チーム医療成功のポイント ~歯科医師、歯科衛生士が一緒に取り組むインプラント治療~



■ 吉野敏明 先生 田中良枝 先生

吉野先生は冒頭、「患者ありき」のチーム医療を成功させるには、歯科医師の意識改革と歯科衛生士の高い知識が求められ、特にインプラント治療では、強く確かな連携が必須であると強調。セミナーでは、吉野先生がインプラント治療の利点・欠点、失敗とその原因、リスクとなる疾患等を、田中先生がインプラント周囲組織と解剖、オペ時のアシスタントワーク等を交互に解説し、吉野歯科診療所におけるチームアプローチの実際も紹介された。

Dr.
DH

インプラント治療の術前・術後管理 ~感染予防とメンテナンス~



■ 岩崎美和 先生

岩崎先生はインプラント治療におけるリスクファクター、術前・術後管理、メンテナンスの流れを示し、インプラント周囲炎予防のためのアプローチの実際を語った。インプラント周囲炎・周囲粘膜炎の早期発見および予防のために、周囲組織の状態を診査項目に準じて5段階に評価できるシートを紹介。評価に応じたメンテナンス計画を立てていく方法を提案し、その重要性を強調した。

DH

ワンランクアップ インstrumentメンテーション



■ 鍵和田優佳里 先生

切れるキュレットを用い、根面形態を把握し、適切なキュレット操作を行うというインストルメンテーションの基本からワンランクアップを目指す操作を解説した。上下顎の歯に合わせた口腔内外での安定したレストを求め、術者の姿勢を決め、第1シャンクが歯面に平行になるように持つことがポイント。患者の正確な病状を知り、歯科医師と共通の認識をもち再評価することで、DHの可能性を広げるチーム医療が行えることを強調した。

DH

すぐに実践！ 口腔機能向上ベーシックトレーニング



■ 杉山総子 先生

高齢社会で摂食嚥下は重要なポイントであり、DHは高齢者が食を通して楽しく暮らし、元気で過ごすための口腔機能向上のサポートを担っており、医療人として誇りをもってほしいと述べた。また、聴講者がガムを噛み、口腔機能の低下した状態を体感した後、口腔機能向上トレーニングの準備体操、嚥下、構音機能の強化、口唇閉鎖、頬筋、舌、咀嚼などの機能強化、唾液分泌向上のマッサージなど、体験トレーニングを交え講演を行った。

DH

症例別にみるPTCの効果と実際



■ 波多野映子 先生

波多野先生は、PTCについての基本的な考え方から補綴物へのメンテナンス、また、う蝕や歯周病などの疾患をもつ患者さん毎のリスクや背景を考慮した対応が大切であることなど、症例別に長期症例から解説した。さらに、PTCペーストを利用したデモンストレーションでは、実際の手技を示しながら歯面や歯肉にダメージを及ぼさないプロならではのきめ細かなPTCのテクニックについてわかりやすく説明した。

DH

2時間集中ホワイトニングセミナー ～話題のティオンオフィスを使いこなす～



■ 須崎 明 先生

講演はホワイトニングの機序説明に始まり、続いて近年の幅広い年齢層におけるホワイトニングへの関心の高さを、演者の豊富な臨床例を基に紹介した。また、特に関心が高まりつつある若年層のホワイトニングについて、患者・保護者との接し方、臨床上の注意点などが詳しく語られた。後半のデモンストレーションでは、「ティオンオフィス」を用い、安全で効果的なホワイトニングのためのポイントを、模型を用い分かりやすく解説した。

Dr.
DH

臨床・下顎総義歯の吸着



■ 阿部二郎 先生 小久保京子 先生

下顎総義歯作りの成功は、吸着にあると言われる。阿部先生は、誰にでも同じように簡単にできる、下顎総義歯製作を講演した。レトロモラーパッドのスジの確認、枠なしトレイ印象法、咬合採得を短時間に行える蠟堤各個トレイ等、下顎吸着のポイントを示した。小久保先生は、吸着を目指した歯科技工を行わないと吸着しないので、阿部先生とは精密模型の石膏等も相談して決めるとのこと。人工歯や歯肉の特性付けやカラーリングも紹介した。

Dr.
DT

機能咬頭を守る犬歯ガイドとバランスングコンタクトを重視した人工歯排列



■ 田中昌弘 先生

田中先生は機能する義歯とは、印象よりも咬合のほうが大切であり、印象が100%であれば咬合は120%の精度が必要である。過度の吸着は長期的予後を考えるとフラビীগムを起こしてしまう可能性があるとして述べた。さらに、犬歯ガイドの意義や各歯牙の咬合的役割、犬歯の削合調整のポイントなどを示し、排列完成までのステップをデモを交えながら詳細に示した。

DT

目指そう！ 咬合調整の少ないクラウン



■ 遊亀裕一 先生

遊亀先生は、間接法で作製されたクラウンが高くなる要因として、人為的ミス、材料の寸法精度、生体の問題を挙げた。それらの要因を一つずつ検証し、適切に対処することで、咬合調整を行う歯科医師に負担を掛けず、しかも咬合接触点が点接触になることで支台歯と対合歯にも過重負担を掛けないクラウンが作れることをステップ毎に解説。特に生体との違いを意識して模型を操作することの重要性をデモで示しながら詳述した。

DT

インプラントによる審美的補綴治療



■ Jean-Pierre Brun 先生

30年に及ぶ豊富な臨床経験をもつ演者が、進化し続けるインプラント審美治療の歴史と最新の術式について解説した。最新のインプラント治療における軟組織の重要性、CAD/CAM、Aadvaシステムを活用した予測性の高い治療の効果が、臨床例を基に示された。また、歯科医師・歯科技工士間でiPadを用い製作物イメージを共有するワークフローが示され、職種間の情報共有に新たな潮流が生まれている現状が紹介された。

Bonded Porcelain Restoration in the Anterior Dentition



■ Pascal Magne 先生

冒頭で、「私は前歯部への治療としてボンデッドポーセレンを行ってきましたが、私の知る限りこれが自然に一番近いのではないのでしょうか」と述べた上で、自身の治療方針の核にはMIがあることを明らかにした。前歯部の接着性ポーセレン修復の成功要因を、治療計画、WAXUP、MOCK-UP、補助的な治療、PREPARATION、即時象牙質シーリング、印象、PROVISIONALS製作、引き渡しのステップ順に解説した。

Seminar

確実性の高いインプラント治療の実践とインプラントシステムの選択 ~新製品ジーシーインプラントPlus臨床的意義~



■ 奥野幾久 先生

ジーシーインプラントReを全面リニューアルし、本シンポジウムの開催前日に発売となった新製品「ジーシーインプラントPlus」。GCのインストラクターを務める同氏が、「ジーシーインプラントPlus」の主な変更点である①フル粗面化および粗面性状の変更、②インプラント形状の見直し（新カッティングエッジによる確かな固定性）、③嵌合部の形状の変更（ドライバー用溝とアバットメント用溝の統一）について詳細を説明した。

明日から役立つCT撮影の必要性和読影の基礎



■ 小川勝久 先生

患者のニーズに応え、治療を成功に導くカギは“診断”にあるとし、診断における画像の重要性を自らの臨床経験をもとに提示。治療に際しては、歯を立体的に把握して治療後の青写真を描き、十分なトレーニングおよび、考察を重ねた上で処置しなければ患者に迷惑をかけることを説明した。CTは骨吸収の程度や歯根破折まで写し出すため、診療の幅を広げることができることを説明し、臨床診断のひとつとして、CT撮影が必要であることを力強く語った。

スタッフとともに考える ~医院も患者さんも明るくするTiONホワイトニング~



■ 櫻井善明 先生 林 智恵子 先生

GC国民意識調査の結果から、口腔に関する不満点は①色、②におい、③歯並びであり、いずれも保険制度ではカバーされていない分野であるが、実際には保険診療を希望する人が多く、また、歯の色に不満を持っていてもホワイトニング治療を受けている人は少ないという現状を明らかにした。その上で、自院でTiONホワイトニングを導入した際に気をつけたポイントと実際の症例を通して、ホワイトニングの成功について考察した。

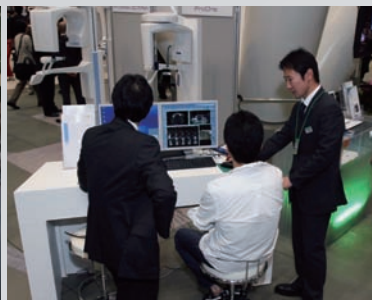
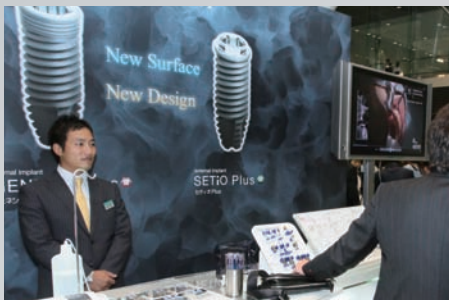
GC Dental Show



多くの歯科医師、歯科技工士、
歯科衛生士の方々が来場し、製品を体験



東京国際フォーラムの展示ホールでは、シンポジウム併催のGCデンタルショーを開催し、注目の新製品や話題の製品「ジーシーインプラントRe ジェネシオPlus」、マッサージ機能を搭載した「フェリーチェ」などを展示しました。ご来場された方々は思い思いに製品にふれ、試していらっしゃいました。また、併設のセミナー会場ではインプラント、CT、ホワイトニングについて講演。展示、セミナーともに多くのご来場者でにぎわいました。



Forum

口腔保健フォーラム 2011「歯と口からはじまる健康ファミリー」

楽しみながら歯の大切さを学び、大いに盛り上がる



10月22日、23日の両日、日本歯科医師会ならびに読売新聞東京本社主催、ジーシーの特別協賛による口腔保健フォーラム2011「歯と口からはじまる健康ファミリー」も開催されました。1日2ステージ、1回定員800名のステージはすべて満員の人気ぶり。親子はもちろんのこと、3世代で参加されているご家族もいらっしゃいました。会場にはスタンプラリーや歯科相談コーナーもあり、親子で楽しむ姿も見られました。ステージが始まると会場は一体化。パート1では、NHK Eテレ「つくってあそび」でお馴染みのフクワクさんとゴロリくんと一緒に工作。パート2では、「すくすく子育て」に出演のつのだりょうこさんが歯科医師の倉治ななえ先生に、パパ・ママを代表して乳幼児期の歯磨きに関する悩みを相談。そしてパート3では、松原美香おねえさんとAKO☆Pのミニコンサートを開催。作って、学んで、歌って、踊って、大いに盛り上がりました。

